

希代の奇人学者 岩元禎・一高教授

自身を「教養」とした勉強家 美少年、秀才を愛した清潔癖も異常

岩元禎（てい）という学者がいた。鹿

である。その間に杜甫の詩を口ずさむ。時々学生を叱る大声をあげる・・・

児島市出身で明治二年生まれ、昭和

岩元さんの兄・和秋氏（九大教授）

一六年没。帝国大学文科大学（いまの

は東大の学生時代ここに下宿していた

東大）哲学科卒。生涯を一高教授とし

が、ことごとくにバカモンツと怒鳴られ

て送った。日本の十大奇人の一人とい

て閉口した。ふとんを敷くと畳の縁に

われ、猛烈な勉強家であった。その人

きちつと並んでいないといつてバカモ

となりを伝える小冊子を、甥の岩元紀

ンツ、いい画集を買ったぞと見せられ

彦氏（旭相互銀行専務）がまとめた。

てまん中から開いたら、バカッ。一生

いずれ伝記をつくる考えという。この

を独身で通したが、九十一歳まで生き

冊子や岩元さんの話などから、鹿児島

て息子の世話焼いた母堂にも、みそ

生まれの「純粹学問者」の姿をたどる

汁が熱くないといつては当たりちらし

と。

たという。食事は一日二回。黒パンと

奇人ぶり――

岩元さんの書いたものから。

すき焼きに決まっていた。特定の店か

「叔父の晩年にその家に泊まった夜、

ら五十匁（二百グラム弱）の肉を買ってき

深夜をずつと起きて読書しているおじ

つちり二日に分けて食べる。油はオリ

の独り言が聞こえてくる。日本語、ド

ープ油が指定だった。

イツ語、ギリシャ語で自問自答するの

希代の潔癖壁。便所に行くのに着物

もたびもはき替えて、大きい方の後に

花うけての歌詞を書いて合格点をも

は金だらいに用意させたお湯でたんね

らった話もある。

んに下半身をふいた。そのくせ洋服は

着たきりスズメ。最高級の生地につく

りながら、よれよれになったのを着続

けた。

病床にふしてからの話。見舞客には

かならず正座をして礼を言った。起き

られなくなると、羽織はかまを持つて

こさせて、あたかも本人がそれを着て

いるようにふとんの上に並べさせた。

無私の学問追究・

一高ではドイツ語と哲学を教えた。

夏目漱石の「三四郎」に登場する偉

ドイツ語はものすごいスピードで訳し

ていくだけ。そして点数がけたはずれ

にからい。四十人の学生のうち二十数

人は落第点。山本有三は怒ってやめて

しまったといわれる。出来る学生には

百点満点で百二十点をつけて事務当局

を困らせた。哲学の点は逆に甘く、答

案の代わりに一高の寮歌 あゝ玉杯に

には全く関心がなかった。

岩元さんは「よくわからないが“オレ自身が教養だ”という考えだったのではないか」と言っている。読み、教える。それ以外にはいつさい興味を示さなかった。漱石については「夏目は英語はできるんじやが、あとでつまらんものを書きおつて」と評したそうた。

古典をこよなく愛した。それは鹿大の「岩元文庫」目録でもしのばれる。

洋書にはプラトン、アリストテレス、ヒルティ、カント・・・などとずらりと並ぶ。漢籍がすごい。「二十一史」五百三十六冊、「十三経註疏」百六十二冊などなど大変な数のようだ。レーシング、ヒルティを愛し、杜甫を世界最高の詩人とたたえた。ヒルティの「眠れぬ夜のために」を日本に紹介したのはこの人とされる。ぼう大な本を読みながらその内容を詳細に記憶していて、学生たちを驚かせた。

書物は生命みたいなもの。ページを開く前には必ず手を洗い、テキストといえども学生がアンダーラインを引いたり書き込みをしたりするのを許さなかった。そんな学生をみつけると猛烈

に起こり「学生に分際で偉大なる著者の文章にここが良いとするしをつけるとはけしからん」と怒鳴りつけ、あげくにはテキストを破って捨ててしまったというエピソードもある。

亡くなったのは喉（こう）頭ガンで食物がのどを通らなくなり、ウィスキー、ブランデーでしばらく生命を保ったという。岩元さんの父で元鹿児島市長岩元禧（き）は三番目の弟である。

（昭和五五年二月一七日南日本新聞）